

御杖村・三峰山登山

コロナ騒ぎ後初めて乗った電車、バス

6月25日、意を決して奈良県の東端・御杖村の三峰山(みうねやま・1235m)に向かった。

近鉄築山駅 6:45 発の電車で榛原駅 7:15 着。7:53 発の奈良交通バスで曾爾村掛西口 8:42 着。バス代 1000 円。御杖村の「ふれあいバス」が来たのが 9:00。登山口着 9:52。

足元に可愛い花々

10:00 登山開始。みつえ青少年旅行村への道と分かれて、橋を渡り不動川沿いの林道をしばらく歩くと小さな橋があり「登り尾コース」の登山道に入る。ウツギの花が残っており、杉林の中を登っていく。コアジサイが多く、コナスビの黄色い花が可愛い、ふと、足元のピンクの小さい花が目についた。アカネ科のイナモリソウだ。

今年2月長崎県川棚町の虚空蔵山で同じアカネ科のサツマイナモリの群落を見た。同科ではあるが属が違い、花期もサツマイナモリは冬～春だが、イナモリソウは初夏の花だ。

カッコウの声が響く林の中の道

↑イナモリソウ 杉林を登り終わると開けた草地に出、そこに小屋が建っている。10:35 着。トイレをお借りし、10:45 出発。林道に出て、すぐに急な階段を上るともう一つ小屋が建っている。再び林に入る手前でコアジサイの群れの中にササユリが3輪花を開いていた。

カッコウの声が響いてき、そしてツツドリのとぼけたような鳴き声、さらにジュウイチの声も聞こえてきた。

11:45 展望のきく場所で休憩。眼下の谷間に御杖村神末(こうずえ)の集落が見下ろせる。アサギマダラがゆったりと飛んでいる。

登山道の脇にお地蔵さん。赤い帽子は可愛いが、プラスチックの賽銭入れがなんとも艶消し。至るところにオカタツナミソウが咲いている。

分水嶺の尾根道を歩いて頂上へ

避難小屋を左上に見てさらに登り、12:25 三峰峠着。ここには高見山から東に伸びる尾根上の縦走路が走っており、昔歩いたことがあるが、今でも道はあるのだろうか。

そしてこの尾根が分水嶺になっており、南側は三重県で水は櫛田川を通じて伊勢湾に流れ、北側の水は名張川から木津川、淀川を経て大阪湾に注いでいる。



↑不動滝(落差 21m)



↑ササユリ



その分水嶺を歩いて 12:40 三峰山山頂着。ナツアカネの群れが飛び交っており、ヤマボウシが白い花を広げて頂きを飾っていた。

↓オカタツナミソウ

久しぶりの不動滝

休憩後八丁平から三峰峠に出て、避難小屋の東側から不動滝コースをくださった。14:15 不動滝着。落差21mを落下する水が飛沫をあげて涼しかった。下りで少し雨が降ったが、すぐに止み、カジカガエルの鳴き声を楽しみながら、溪流沿いの林道を歩いて15:00 登山口に帰着。ここで53分のバス待ち。さらに姫石温泉前で1時間待って、三重交通のバスで名張駅に出、近鉄電車で帰宅した。



たくらん

托卵--それぞれの種存続を賭けた攻防 生物進化の不思議

夜鳴き鳥

5月のある日、午前3時に目が覚めた。何かの音が聞こえる。かすかだがホトトギスの鳴き声だ。そうだホトトギスは夜でも鳴くのだ。それにしても、どこで鳴いているのだろう。いや、この鳥は飛びながら鳴くこともあるから……。などと考えていたら、間もなくイソヒヨドリがよく響く声で囀り始め、窓の外が白み始めた。 オオヤマレンゲ(7月大峰山系で)→

托卵

この5月～6月の山歩きで、ホトトギス、カッコウ、ツツドリ、ジュウイチの鳴き声を聞いた。これら4種の鳥はいずれもカッコウ科に属し、子育てを他種の鳥に委ねる(というより押し付ける)托卵鳥なのだ。例えばホトトギスはウグイスなどの、カッコウはホオジロなどの巣に産卵し、子育てをその仮親にさせるのだ。しかも仮親の産んだ卵や雛は托卵する鳥の雛によって巢外に放り出され、全滅させられるので、仮親はたまったものではない。

当然仮親の反撃はあるのだが、托卵される卵が自分の卵とよく似ることもあり、他種の雛を懸命に育てることになってしまうらしい。小学生の頃、本で托卵を知った時は「なんてひどいことを」と思い、ウグイスやホオジロに同情したものだ。

ドラマ「はね駒」のみつの心情

連続テレビ小説「はね駒」の再放送が続いている。6月半ばには主人公の妹・みつが嫁ぎ先で出産後、病気を理由に実家に帰され、我が子会いたさに悲嘆にくれる場面があり、そのみつを支える家族の姿と共に見る者の涙を誘った。蛇足ながら小林稔侍、樹木希林らの好演が随所に光るドラマだ。

ホトトギスらは「ずるくてひどい」のか、「可哀そう」なのか

「托卵」という習性を「ずるい」と思う人は少なくないが、一方で「子育てを自らの手で出来ない哀しさ」として、上記のみつの心情等になぞらえてホトトギスらに同情する傾向も日本人の中にはあるようだ。いずれも人間の立場で勝手に想像しての感情・思い込みであるのだが……。

体温が一定しない鳥たち

これらカッコウ科の鳥は体温維持機能が弱く、「異温性」と呼ばれる体質をもち、抱卵には向かないことが明らかにされてきている。こうなると「可哀そう」説が優位に立ちそうだが、進化の過程で「托卵」が先なのか、「異温性」が先なのかは不明との事。進化の謎の解明は進むだろうが、我々人間がなすべきは、自然をこれ以上破壊しないこと。これはコロナ禍の重要な教訓の一つだ。

